

## 最終話 80 年代の終わり、そしてアイドル映画の変質

### ●斉藤由貴が大森一樹三部作で本領発揮

薬師丸ひろ子、原田知世が去って角川映画のアイドル路線が終わるのと入れ替わるように新しいアイドル女優が登場した。斉藤由貴である。

1966 年生まれで、薬師丸よりは 2 年下、原田よりは 1 年年長の斉藤は、高校 3 年在学中にグラビアアイドルの登竜門である「少年マガジン」主催のコンテスト「ミスマガジン」でグランプリを受賞し芸能界入りした。テレビ CM でデビューし、その中で流れる歌手デビュー曲「卒業」が 85 年の卒業シーズンにヒットして一躍スターとなる。ちょうど彼女も高校卒業の時期だった。

85 年 4 月にスタートしたテレビドラマ「スケバン刑事」に主演し、アイドルの座を確固としたものにする。なお、この次のシリーズ「スケバン刑事Ⅱ」のヒロインが前出の南野陽子だ。そしてこの年暮、東宝 86 年のお正月映画『雪の断章 情熱』（85 相米慎二 脚・田中陽造 原・佐々木丸美）で映画デビューを果たす。

薬師丸の『翔んだカップル』で監督デビューした相米慎二は、その後『魚影の群れ』83 で第 7 位、『台風クラブ』85 で第 4 位とキネマ旬報ベストテン入りする作品を世に問い、三十代にして独自の立場を日本映画界において築いていた。ワンシーンワンカットの「長廻し」と呼ばれる撮影方法は既に定評を得ており、ここでも映画空間を奔放自由に支配して相米らしさを発揮する。

そんな「専制支配」の下、斉藤は北海道ロケの冷たい川に飛び込まされてずぶ濡れになりつつ奮闘し、意味がわかりにくかったろう演出にも懸命に応じた。継子いじめだったり復讐殺人だったり紋切り型物語である原作を大胆に処理して新感覚のアイドル映画にしようとする作り手たちの企図に、彼女なりに付いて行っていたのである。

このお正月番組のメインは紺野美沙子、浅野温子、沢口靖子、富田靖子の四女優が四姉妹に扮する華やかな企画『姉妹坂』（85 大林宣彦）だった。こちらを監督した大林も、『転校生』82 が第 3 位、『廃市』84 が第 9 位、『さびしんぼう』85 が第 5 位とキネマ旬報ベストテンの常連格である。だが、観客に強烈な印象を与えたのは『雪の断章 情熱』と主演の斉藤だった。この作品で彼女は、毎日映画コンクールのスポニチグランプリ特別賞（新人賞）およびブルーリボン新人賞を受賞している。

そして斉藤由貴のアイドル女優としての本領は、『恋する女たち』（86 大森一樹 脚・大森一樹＋渡邊孝好 原・氷室冴子）に始まる大森一樹監督による三部作においてみごとに発揮された。大森一樹監督は当時 34 歳、1952 年の早生まれでわたしの 1 学年上で

あり、「内藤洋子と酒井和歌子のどちらが好き？」世代である。吉川晃司の三部作に続き、斉藤由貴というアイドル女優を得て遺憾なく実力を発揮した。

『恋する女たち』は87年の東宝お正月作品として公開されたが、併映は人気漫画を劇場用アニメにした『タッチ 2』（86 金春智子）であり、堂々と番組の主軸を担っている。興行的にもヒットし、前年の『姉妹坂』『雪の断章 情熱』の成績を大きく上回った。86年4月から半年、NHK朝の連続テレビ小説「はね駒」に主演して平均41.7%、最高49.7%の視聴率で全国に親しまれたこともあったろう。斉藤は「はね駒」で芸術選奨文部大臣新人賞をも受賞している。

原作者の氷室冴子は80年代から90年代にかけ少女を主人公にした青春小説でベストセラーを連発した人気作家であり、既に私立女子中学の寄宿舎を舞台にした「クララ白書」が『クララ白書 少女隊PHOON』（85 河崎義祐）としてアイドル・グループ少女隊主演で映画化されていた。この『恋する女たち』は女子高生たちの物語である。映画では場所が金沢に設定された。

ヒロイン多佳子（斉藤由貴）は高校2年生。田舎の中学から金沢の高校に進学し、大学生の姉（原田貴和子）と同居している。その彼女の高校生活、恋愛と失恋が多く、の少女少女たちを交えつつ語られていく。クラスメート役で「おニャン子クラブ」の高井麻巳子、テレビドラマで人気が出てきていた相楽ハル子（現・晴子）が映画デビューし、仲良し三人組を演じた。「一世風靡セピア」から『南へ走れ、海の道を』（86 和泉聖治）で映画デビューしたばかりの柳葉敏郎が多佳子の恋の相手となる少年役だ。

この爽やかな味のある青春映画を、わたしは86年のベストテンで4位に選び高評価している。

【序盤のペダンチックなお遊び過多には閉口する。サリンジャー、ツルゲーネフ、万葉集、『ナインハーフ』と『ナイン』等々次から次へと思わせぶりの引用ばかりで、さながら蘊蓄オンパレードの観がある。その要になる斉藤由貴のせりふ廻しが抽象的な事柄を話すときしどろもどろになるから聞くに耐えないし、背伸びしたふるまいの数々もわざとらしくて見るに耐えない。相米慎二監督の『雪の断章／情熱』84における彼女の使い方のうまさとどうしても比較してしまう。

ところが、後半へ入ると一転、斉藤由貴がすばらしい。淡い恋に翻弄されて泣き、転び、わめき、十六、七の少女の中にある熱いもやもやした思いを、いきいきと表現する。同時に、一言では説明できない女の子たちの微妙な心象をいろんな角度からじわじわ切り込む手法で描き出す演出が生きてくる。ひそかに好きな同級生から皮肉にも彼の恋人の話を聞かされる場面での、漫画の「フキダシ」を利用した表現も、ぴったり合っている。

親や先生といったオトナたちとの関わりに触れず、友人、姉妹とのつきあいだけで話を進めていくところなど、男子高校生たちの青春像をみずみずしく描いた『赤頭巾ちゃん気をつけて』

(70 森谷司郎)を思い出した。特に大きな事件もなく、ごく普通の高校生たちの日常をたんと描いていくうちに、若さそのものの喜びと痛みが感じられてくる。

大森一樹監督の最高傑作だ。これまでは、作中に自己を投影することに熱心すぎてドラマのバランスを損なったり感傷に流れすぎたりしていたし、「映画引用」に過度にこだわって鼻につくケースもあった。それが、女子高生という彼自身が実際に経験していない遠い存在を題材にすることで余分な力が抜け、うまく青春を客観化し得ている。

『ヒポクラテスたち』にしろ、吉川晃司の「民川裕司」三部作にしろ、これまで大森一樹作品にはどうしても全面肯定できないものを感じていたが、今度という今度は素直に脱帽したい。いつかこんな映画を観せてほしいと願っていて、そのことが従来の作品に不満を感じさせていたのだと思う。】(B級映画評論家通信 87 年 2 月)

続いて 87 年の夏休み興行で少年隊の『19 ナインティーン』を従えたのが『トットチャンネル』(87 大森一樹 脚・大森一樹 原・黒柳徹子)である。黒柳徹子がテレビ草創期のNHK専属俳優になっていく少女時代を回想した原作小説に沿い、テレビ俳優養成所の仲間たちとの青春が描かれる。テレビの青春時代と黒柳たちの青春時代が重なって、初々しい試行錯誤が繰り広げられ、この時点から三十余年前の話でありながら少しも時代のズレを感じさせない新鮮な青春映画になっていた。

角川映画から転じた渡辺典子、モデル出身の村上里佳子(現・RIKACO)、網浜直子、俳優・高島忠夫の長男で大学在学中のところを抜擢されて映画デビューの高嶋政宏がヒロインの仲間としてフレッシュなところを見せた。それを評価し、わたしはこの作品を 87 年ベストテンの 6 位に選んでいる。

【『恋する女たち』に続き、大森一樹監督と斉藤由貴の組み合わせが爽快な一作を生んだ。

大森一樹監督といえば、のびのび映画を撮ってきた作家らしく作中に趣味的な遊びを多用するのが特徴だったが、本筋から離れたお遊びをいくらでも入れたくなるようなこの題材を、『ゴジラ』撮影隊登場くらいに抑えて自制した演出を貫いている。高橋長英のオカマが随所にアクセントとして出てくるのや植木等にことさらボルテージを落とした演技をさせるくらいの趣向なら、むしろ娯楽映画には不可欠な観客に対するサービスとして、ほどよく心地良い。

斉藤由貴がアップで見せる表情の微妙な揺れ、曇り、輝きの数々が、画面を通していきいきと伝わってくる。『恐怖のヤっちゃん』で精彩のなかった渡辺典子が元気なのをはじめ、周囲の若者群像も威勢が良く、TVの草創期にかかわっている気負いと興奮が隅々にまで行きわたっていて観ている側まで昂揚させられてくる。笑いの要素も単に笑わせるためのものに終わらず、TVに取り組む者たちの気負いの副産物として受けとめることができる。

原作者でヒロインのモデルである黒柳徹子の懐古譚によるグラフィティものとしてではなく、斉藤由貴という現在の若きアイドルスター自身の成長物語と思えてくるような構成になっ

ているのが適切だ。常識に欠ける娘の手前勝手な成功話という厭味な側面は排除され、懸命に「テレビジョン」創りの一翼を担って努力する女の子の姿が感じられて思わず声援したくなる。ラストシーン、人のいない公園の街頭テレビの前でひとり決意を新たにするとき、先輩女優・久野綾希子から教わった「涙をとめる法」を実行するのをさりげなく、ほんとうにさりげなく示すのが、すてきなエンディングになっている。夢を追い続け決然と生きていくこんな素直な頑張りを見せられては、こっちだって熱いエールのひとつも送りたくなるというものだ。】(B級映画評論家通信 87年9月)

三部作の最後は、東宝 88 年お正月映画として公開された『「さよなら」の女たち』(87 大森一樹 脚・大森一樹)だ。『恋する女たち』に続いて氷室冴子原作という触れ込みだったが、実際は大森監督のオリジナル脚本だったようだ。斉藤演じるヒロインは、大学卒業を前にアルバイト先であり卒業後正社員になれると思っていた札幌のタウン誌を解雇されてしまった。呆然とする彼女は、突拍子もない宣言をした父母など周囲の人間たちのユニークな行動に惑わされながら北海道から東京、関西へ転々としていく。

【『恋する女たち』『トットチャンネル』と快打連発の大森一樹監督＝斉藤由貴主演のコンビ作品だったが、この三作も、昔GSのアイドル歌手だったという父親・伊武雅刀が突然カムバックを表明し高校教師の職も父親の役目も捨てて芸能界に返り咲く、という話の発端が意表を突き初手から期待に胸ふくらまされる。オトナになってからやりたいことは子どものときにやりたいことと同じくらいたくさんある、と言い切り四十路の青春を標榜する父親と若さのまったただなかにいる娘との関係が展開されていくとしたら、これは興味津々だ。

しかし、このユニークな父娘関係は作品世界の明確な軸にはなっていない。それは、あまりにも面白そうなシチュエーションや人物が数多く登場するためだ。タウン情報誌の編集部、レコーディングの現場、宝塚歌劇ファンの世界とファン雑誌の編集部、グルメ情報本の取材、といった誰しも関心をそそられる一風変わった場が次々と示される。

また、父親だけでなく、急にイルカの調教師を志す母親・浅茅陽子、雑誌を渡り歩く子連れのフリー編集者・朝加真由美、宝塚グルービー古村比呂、前衛劇団を主宰している山田辰夫、宝塚ファン雑誌の編集長・室井滋(『トットチャンネル』に引き続き元気に怪演)、そして宝塚音楽学校出身の税理士・雪村いづみと、強烈な個性を持った人間にもこと欠かない。

いきおい、映画はそれらの状況や人間像を示すことに忙しくなり、百花繚乱ではあるがこれといった芯のないバラエティのようになってしまっている。ヒロイン斉藤由貴は、さながら狂言廻し的存在にしかかなり得ず、いつもながら豊かに変化する表情の魅力もどうやら空転模様だ。氷室冴子原作といっても実際には大森一樹監督のオリジナル脚本らしいが、盛り沢山のアイデアを用意したために的を絞りそこなっているきらいがあり、ヒロインの思いが周囲のにぎやかさの間に埋没している。

この物語を通して究められねばならぬ重大な疑問は、果たして彼女もまた父親たちに負けずすてきな四十代を迎えることができるような青春時代を送っているかどうかだと思うのだが、その解答は結局保留されたままになっている。それがもどかしい。】（B級映画評論家通信 88 年 1 月）

ただ、周囲のキャラクターが強烈で、50 年代に美空ひばり、江利チエミと「三人娘」を形成し 23 年ぶりに本格的映画出演する雪村いづみをはじめ個性派俳優たちがそれをいきいき表現するため、斉藤の影は薄くなってしまいうらいがあった。桂三枝の新作落語を映画化した幕末喜劇『ゴルフ夜明け前』（87 松林宗恵）との 2 本立という首を傾げる番組構成もあり、興行的にもパツとした結果が出ていない。

結局、斉藤由貴のアイドル女優としての活躍はここで終わることになった。それでも女優としては、『香港パラダイス』（90 金子修介）、『あ、春』（98 相米慎二）など今日に至るまで多様な活躍を見せている。

## ● “不良アイドル” を生んだ『ビー・バップ』シリーズ

さて、この時期、男優の人気で大成功したシリーズがある。86 年東映のお正月番組で薬師丸ひろ子の『野蛮人のように』の併映作となった『ビー・バップ・ハイスクール』（85 那須博之 脚・那須真知子 原・きうちかずひろ）だ。83 年から 03 年まで 20 年間にわたって連載された週刊青年漫画誌「ヤングマガジン」の看板作品

「BE-BOP-HIGH SCHOOL」の映画化で、薬師丸人気との相乗効果だったとはいえその年の興行成績 2 位の大ヒットとなった。

作者のきうちかずひろは連載開始時弱冠 23 歳、これが出世作となる。単行本で 48 巻、『ビー・バップ・ハイスクール』としての映画化が 6 本、『BE-BOP-HIGH SCHOOL』としてビデオ映画化が 17 本、TBS でのドラマ化が 2 本、ビデオ映画アニメが 7 本という「お化けコンテンツ」ぶりだ。後に発揮されるきうちの多才な活動ぶりを見ると、これにも納得がいく。

なにしろ自ら原作、脚本、監督した竹中直人主演のビデオ映画『カルロス』91 で映画作家としての力量にも並々ならぬところがあるのを見せつけ、

『BE-BOP-HIGH SCHOOL』94、『JOKER ジョーカー』96 とさらに 2 本のビデオ映画から、『鉄と鉛 STEEL & LEAD』（97 きうちかずひろ）を脚本監督して堂々映画監督の実績を積んだ。他に『共犯者』（99 きうちかずひろ）があり、みごとなハードボイルドサスペンスを見せてくれている。小説も多数執筆しており、本名に木内一裕名義で書いた「藁の楯」は『藁の楯』（13 三池崇史）として映画化されている。

『ビー・バップ・ハイスクール』の主人公は、私立愛徳高校2年の中間徹＝トオルと加藤浩志＝ヒロシのコンビである。能天気で気が短く硬派を気取るトオルと、スケベで剽軽な軟派のヒロシは対照的ながらつるんで行動する。リーゼントに学ラン姿はお揃いだ。彼らのマドンナは暴力嫌いな学校一の美少女・泉今日子、言うまでもなく小泉今日子がモデルだ。そしてツッパリ美少女の三原山順子、こちらは三原順子がモデル。

話の基本は、トオルとヒロシの日々の行状と校内の同級生、下級生ツッパリたちとの交流だ。そして他校の連中との「抗争」が始まり、クライマックスは学校同士の大乱闘になる。つまり不良男子高校生たちの抗争劇なのである。ただ、過去の実録やくざ映画全盛期の東映が作ってきたこの種の映画、たとえば星正人主演の『青春賛歌 暴力学園大革命』（75 内藤誠）、『男組』（75 内藤誠）、岩城滉一主演の『爆発！ 暴走族』（75 石井輝男）、『爆発！ 暴走遊戯』などとは明らかに趣を異にしていた。

何より、『ビー・バップ・ハイスクール』にはユーモアの匂いがあった。同じ漫画原作でも『男組』のようにシリアス一辺倒ではなく、トオルもヒロシも抜けたところのある二枚目半キャラクターだし、笑わせる小ネタもふんだんに配置されている。もとよりこれが原作者きうちの狙いであり、漫画『BE-BOP-HIGHSCHOOL』の広く息長い人気の秘密なのだった。今日子と順子の存在も花を添えている。

映画化に当たり、既成のアイドルやスターは起用されていない。わずかに、前出の中山美穂が今日子役で出演し主題歌「BE-BOP-HIGHSCHOOL」を歌うことが事前の話題を呼んだだけだ。トオル役の仲村トオルは専修大学の学生で演技経験はほとんどなく、主役公募オーディションに約 6000 人の応募者の中から原作者きうちの強い推しで合格し芸能界デビューした。役名の「中間徹」と芸名と読みが同じである本名の中村亨が似ているところにも運命を感じさせる。

ヒロシ役の清水宏次朗も、このオーディションできうちに見出されている。高校在学中の 81 年に歌手デビューしていたが、いまひとつの状況の中での俳優業挑戦だった。俳優デビュー後も歌手活動を続けており、『ビー・バップ・ハイスクール』シリーズがらみの曲も 2 曲出している。順子役の宮崎ますみ（後に萬純）はカーオーディオメーカーのクラリオンが毎年選ぶキャンペーンガールでアグネス・ラム、烏丸せつこらを世に出した「クラリオンガール」の 85 年度合格者で、彼女も本格的映画出演は初めてだった。

その他の高校生役は全く無名の出演者が占めた。ファンが呼べそうなのは歌手として新人賞を取ったばかりの中山美穂だけ。にもかかわらず、映画は大ヒットし大きな反響を招いたのである。もちろん、依然高い人気を保っていた薬師丸ひろ子の『野蛮人のように』の力が大きかっただろう。しかし、『ビー・バップ・ハイスクール』の興行力が高かったことも、また明白だった。

漫画原作、無名の役者たちといえば、日活が大ヒットさせた『嗚呼!! 花の応援団』（76 曾根中生）がある。主役の南河内大学応援団親衛隊長・青田赤道を演じた今井均をはじ

め、団員たちは皆役者歴のない者ばかりだったが、人気漫画の威力に加え人物設定の面白さと曾根中生監督の思い切ったデフォルメ演出で思わぬ大ヒットとなり、ロマンポルノが行き詰まっていた日活を大いに潤した。

その真価は、すぐさまシリーズ化された第2作『ビー・バップ・ハイスクール 高校与太郎哀歌』（86 那須博之 脚・那須真知子 原・きうちかずひろ）によって明らかになる。東映 86 年の夏休み興行に出たこの作品の併映作は同じく漫画原作の羽賀研二主演『BE FLEE!』（86 中田新一）であり、薬師丸人気から離れたにもかかわらず『野蠻人のように』と組んだ番組の8割、約11億5千万円の興行収入をあげ、年間興行収入ベストテンで第6位を占めたのである。

シリーズ化された『嗚呼!! 花の応援団』がすぐさま失速し、やはり漫画原作ものを併映作にした2作目、3作目が惨敗したのとは対照的な結果となっている。青田役が1作毎に変わるなどスターを産み出せなかった『花の応援団』と違い、『ビー・バップ・ハイスクール』は仲村トオル、清水宏二郎を一気に人気スターの座に押し上げた。特に仲村は、デビュー作『ビー・バップ・ハイスクール』でいきなり、毎日映画コンクール新人賞を獲得している。

それは、喧嘩活劇を期待した若い男性観客だけでなく、仲村、清水をお目当ての女性観客をも集めたことを意味する。2人それぞれの個性の違いがうまく作用し、男性同士2人がそれぞれ魅力を発揮してコンビを組む、ハリウッドで言う「バディ・ムービー」としての魅力を発揮していた。女性ファンの間には、好みによってトオル派とヒロシ派があったに違いない。

脚本の那須真知子、監督の那須博之はともに52年生まれの夫婦であり、那須夫妻の若い感覚が観客に受け入れられたのも見逃せない。女性脚本家を書くことで、今日子と順子の存在が不良たちの間の格好のアクセントになった。また、那須監督の従来のこの種の映画にはなかった無鉄砲とも言える新しい感覚の演出は静岡のローカル電鉄会社とタイアップして電車内の乱闘を実現し、果ては走行中の電車から喧嘩相手を川に蹴落とすアクション場面まで作り上げる。

ジャイアント馬場、アントニオ猪木の下、ジャンボ鶴田、天龍源一郎、藤波辰巳、長州力、タイガーマスク、前田日明などが活躍した80年代はプロレス人気が沸騰していた。わたしも後樂園ホールや国技館に観戦に行ったものだ。『ビー・バップ・ハイスクール』の乱闘シーンでは当時流行のプロレス技が多用され、それもこのシリーズの新鮮さと同時代性を増している。

2本連続のヒットを飛ばしたことで、仲村と清水は『ビー・バップ・ハイスクール』だけの要員ではなくなる。仲村は、那須監督が抜擢された東映87年のお正月番組『紳士

同盟』（86 那須博之）に主演の薬師丸に思いを寄せる後輩の役で出演する。清水は、その後東映の長期ヒットシリーズとなる『極道の妻たち』（86 五社英雄）に「姐さん」岩下志麻配下の若いやくざ役で出演した。いずれも、人気と活躍を買われての起用だった。

3 作目『ビー・バップ・ハイスクール 高校与太郎行進曲』（87 那須博之 脚・那須真知子 原・きうちかずひろ）は、東映 87 年春休み番組に登場する。併映作は漫画原作で工藤夕貴主演の『本場ちょしこうマニユアル 初恋微熱篇』（87 中田新一）。以後中山美穂が出演しなくなり（今日子がアメリカ留学という設定）、代わって気の強い女子中学生・翔子役の五十嵐いづみが加入、第 1 作で敵役だった小沢仁志がトオル、ヒロシに絡む他校の番長でモテ男の前川役でレギュラー化するなど、このシリーズで売り出した「純血」メンバーで固めてきた。

中山美穂が抜けても人気は揺るがず、この番組も 10 億円余りを稼ぎ年間興行収入 8 位にランクされた。そして夏休み興行では仲村が単独で中山と共演する『新宿純愛物語』（87 那須博之）が企画される。ただ、直前になって中山が突如降板し、急な公募で選んだ新人・一条寺美奈との共演に変更されるアクシデントがあり、偶然知り合った青年と女子高生が警察とやくざの双方から追われる映画はスピーディーな展開で面白かったのだが興行的には失敗してしまう。

それでも東映 88 年お正月番組の『ビー・バップ・ハイスクール 高校与太郎狂想曲』（87 那須博之 脚・那須真知子 原・きうちかずひろ）は、漫画原作で南野陽子主演の『はいからさんが通る』（87 佐藤雅道）を併映作にして再び大ヒットを飛ばす。12.5 億を稼ぎ出して年間興行収入 6 位、衰えぬ『ビー・バップ』人気を感じさせた。その当時の勢いを、この文章から感じてほしい。

【 好調シリーズ第四弾、草薙幸二郎の世界史の老教師が大地康雄の竹刀片手の数学教師に代わったくらいでおなじみのメンバーがずらり顔を並べるのが、シリーズ映画ならではの醍醐味だ。今さら人物紹介の必要はないから、東映マークの後、いきなり「七夕野郎とは……」と重厚な雰囲気字幕が出て、女にかまける間抜けさがテーマであることが単刀直入に示される。

したがって早くも冒頭、ヒロシとトオルの主人公コンビは少女隊の女子中学生トリオを追いかけてまわすことになるが、ここで、喧嘩の助太刀をしたら三人で合計六個の胸を触らせてあげるといふ彼女たちの提案に逆上した彼らが「チチ!？」と乗り出すアクションを四回、「六コ!？」を三回、しつこく反復してみせるのが爆笑させる。今やスターとなりつつあるヒロシ＝清水宏次朗、トオル＝仲村トオルにこんなアホらしいことをやらせるあたり、那須博之監督のお遊び精神は少しも損なわれていない。

前作『新宿純愛物語』ではヒロイン一条寺美奈の友人役で仲村トオルのことをあんな男やめ



なさいとけなし続けていた五十嵐めぐみが、ここではトオルを慕う少女・順子に戻って濁水にダイビングまでするほどの活躍を見せ、今度是一条寺の方が端役という逆転も、いかにも量産娯楽映画らしい着想でうれしくなる。

その一方、ヒロシとトオルの眼つきの鋭さは失われていない。いくら女の前でニヤついているように見えていても、いざとなると獣めいてギラリと眼光を一尖させる迫力はこれまで通りだ。世間の常識的な生き方に拘泥することなく自分に忠実にやっていこうとする少年らしくいういしい覇気が踊り、きらめいて美しい。

ただしアクションの方はいささか低調で、名物の宙を飛び地を走るオーバーな動きも、吊ってあるピアノ線が露骨に見えたりアニメーションでお茶を濁したりとアラが目立つ。仲村トオルの方はまだ身体を激しく動かすが清水宏次朗はだいぶ楽をしていて、クライマックスの乱闘もスケールが小さく、相手のフライング・ニードロップ（急降下膝落とし）自爆から反撃に転じてニークラッシャー（膝砕き）からヘッドバット（頭突き）へつなぎブレンバスター（脳天砕き）で決めるというプロレス技そのもので決着がついてしまう。

そのぶん、ヒロシとトオルの仲を分断しようと心理的圧迫を加えてくる敵方とのしのぎ合いが前面に出るが、これとても、虜となった相棒を救いたいならプライドを捨ててオカマの扮装をして来いと難題に悩みはするものの、解決の方はうやむやに逃げている。これまで快走してきた那須真知子脚本も、さすがにこのへんはタネ切れだったのだろうか。

それでもラスト、敵を倒した後じゃれ合う二人を順子＝宮崎萬純が「いいねえ！」と羨み、翔子が「何で？何で？」と騒ぐ中、ヒロシとトオルの馬鹿話の掛け合いが続いていく終わり方には、次作へとつなげる勢いがまだまだみなぎっている。

トシだからもう高校生役なんか……と泣き言の出る出演者たちに対し、那須監督、男は四十までは高校生が演れる！とのたもうたという。「四十になっても番長だ！」とは往年の東映人気シリーズ『不良番長』での梅宮辰夫・番長の名セリフだが、「四十になってもツッパリ」という根性でこうした映画を作り続けてほしい。】（B級映画評論家通信 88年1月）

『新宿純愛物語』が清水抜きで仲村だけのために企画されたように、仲村トオルは『ビー・バップ』のトオル以外のキャラクターもできる役者として仕事の幅を広げていく。

86年10月から1年間放映されてヒットしたTVドラマ「あぶない刑事」では、柴田恭兵、館ひろしの主役刑事コンビの弟分扱いされる若い真面目な新米刑事の役でファン層を広げ、その映画化『あぶない刑事』（87長谷部安春）、『またまたあぶない刑事』（88一倉治雄）、『もっとあぶない刑事』（89村川透）に出演した。また、後藤久美子の『ラブ・ストーリーを君に』（88澤井信一郎）で中学2年の幼いヒロインの相手をする大学生、主演した『悲しい色やねん』（88森田芳光）でやくざの跡取り息子と、作品内容を追求する監督の映画にも挑戦する。

第5作『ビー・バップ・ハイスクール 高校与太郎音頭』（88 那須博之 脚・那須真知子 原・きうちかずひろ）には清水宏次朗が出演せず（ヒロシは警察に捕まっているという設定）、宮崎萬純の順子の出番も少ない。これではいくらトオルや前川たちが頑張っても意気あがらず、南野陽子の『菩提樹ーリンデンバウムー』と組んだ夏休み番組は興行的にも初めて失敗した。

シリーズは、次の『ビー・バップ・ハイスクール 高校与太郎完結編』（88 那須博之 脚・那須真知子 原・きうちかずひろ）で終結する。東映 89 年のお正月番組ではあったが、併映が漫画原作とはいえ大人観客を当て込んだ『恋子の毎日』（88 和泉聖治）というちぐはぐさもあり、興行的な勢いは戻らなかった。清水宏次朗＝ヒロシも復帰し、順子や前川もいいところを見せ、いつも通りの明朗な調子で有終の美を飾ったのには救われたが。

実はこの後、仲村、清水コンビはもう一度「バディ・ムービー」で顔を合わせている。『六本木バナナボーイズ』（89 成田裕介）は六本木を舞台にした喜多嶋隆の青春小説の映画化で、仲村は写真家、清水はカフェ店長という幼なじみの二人は喧嘩っ早くって俠気があり、弱い者を助けて地元やくざと一戦を交える勇ましさだ。映画の作りも軽快で楽しく、『ビー・バップ』のようにシリーズ化されるのを期待したのだが、それを許すような興行成績をあげることはできなかったようだ。

仲村トオルはそれから映画界の第一線で多数の映画に出演し、香港、韓国、中国の映画にも積極的に出演してアジアの国際スターと呼べる活躍ぶりだ。清水宏次朗は、主にビデオ映画のやくざものに多数出演している。『ビー・バップ』が続いた3年間、トオルとヒロシは薬師丸ひろ子や原田知世に負けない「不良アイドル」だったのである。

## ●80 年代最後のアイドル「ゴクミ」

80 年代最後のアイドルは、「国民的美少女」と言われ美少女ブームを巻き起こし「ゴクミ」の愛称で絶大な人気を集めた後藤久美子だ。小学 5 年生のときからモデルの仕事を始め、中学 1 年の 86 年 NHK ドラマ「テレビの国のアリス」に主演して俳優デビューする。

87 年には NHK 大河ドラマ「独眼竜政宗」をはじめ数々のドラマに出演し、日本映画テレビプロデューサー協会のエランドール賞新人賞を受賞した。13 歳中学 2 年でデビュー 2 年目の彼女が 21 歳の国生さゆり、18 歳の富田靖子、20 歳での南野陽子、22 歳の仲村トオルと、何年もキャリアが上の面々と同時受賞だったのだから、その急激な売れ方が想像できよう。

そして主演で映画デビューしたのが東映『ラブ・ストーリーを君に』（88 澤井信一郎 脚・丸山昇一 原・ディディエ・ドゥコワン）である。白血病で死んでゆく 14 歳の少女を堂々と演じ切った。命限られた娘にせめて初恋の真似事でも……と母親があてがう相手となる大学生を演じたのは仲村トオルだ。『ビー・バップ』では高校生だが、ここでは実年齢と同じ大学 4 年生。2 人とも実年齢の役にすることで、実に自然に見えた。

20 歳の薬師丸ひろ子を『W の悲劇』で使い、17 歳の原田知世を『早春物語』で鍛えた澤井信一郎監督は、13 歳の後藤に役に適した演技をさせてその魅力を十分に引き出した。大学生の属する山岳部のコンパに連れて行かれた際、場に全く物怖じせず雰囲気壊さないためビールジョッキを口に運んでみせるあたり、堂に入っている。そもそも作品全体が実に周到で丹念な映画作りとなっており、わたしはその完成度に圧倒された。この年のベストテン 6 位に選び、次のような批評で賛美した。

【 永遠に思い続けるだの、生涯忘れないだのと、永遠に……、生涯……という文句を口にするのは簡単だ。それでいて実際のところ人の心はうつろいやすく、そんなふうに永久に何かが不変であることは極めて難しい。だが、その人間がほどなく死んでいくさだめにあるとすれば話は別だ。そんな人間の言う永遠に……であり生涯……ありは、額面通りの重みを持ってくる。

少女・後藤久美子が、中学二年のいたいけな身でそうした状況に直面し、卒業を前にした大学生である青年・仲村トオルとのふれあいを通して出会う感動のひとつひとつにこうした深い思いをぶつけてくるのが、ひどく真に迫る。短い余命に生きがいを与えてやろうと母親があてがったいわば人工恋人である青年と少女との間にほんとうの恋が生まれ育っていくのも、こうしたせっぱ詰まった境遇に由来するのだ。

クライマックスは西穂高への登山行、命数残り少ない少女のために青年は彼の愛する山と一緒に登ろうと計画する。真新しい装備に身を固めた彼女をいたわりつつ山頂めざして進んでいくが、あとわずかのところまで到達していながら限界が来てついに諦め、「まだ行けます」と言い張る少女に向かい青年は決然と下山を宣言する。このつらい決断の瞬間が、観る者の胸を最も激しく揺さぶる。もし仮に頂上を征服できていたとしても、与える感動の深さでは、この断念のせつない潔さにかなうまい。

だいいち普通なら、死病にとりつかれているにもかかわらず険しい山に挑む決心をするところこそがカタルシスの第一の急所になりそうだが。しかしここでは、登る決心より諦めて下りる決断の方が、重大なポイントとして扱われている。断念の痛みが、単に登山の中止にとどまらず生への絶望とまで重なってきて強烈に響く。

そして映画は、二人が山を下りていく過程を、登る道のりに比べるとずっと丹念に、丁寧に辿っていく。青年は少女を背負い励まししながら、慎重に一步一步足の踏み場を選んで岩場を下る。往路は挑戦の成否が懸念されるだけだったが、復路では、果たして少女の命の灯を消さぬまま麓に着けるだろうかと心配がにわかに切実に迫ってくる。登り途中で希望をこめて石を積

んだケルンの姿も、こうなって下りる途中で見ればまるで少女の墓碑のようにさえ思える。

——そう、この映画はそもそも、情感を昇りつめさせるのでなく、むしろ抑え、降下させようとする。何処へ？ ……少女をいざなう暗い死の淵へ。

巻頭、彼女が不治の病に冒されている事実が判明して以来、治癒する奇跡を待望させたりとか刹那的生きがいを設定して残る全力を傾注させたりとかいった方向へは話を進展させようとしていない。ただひたすら、予定されている死へと向かって、デクレッシェンドする葬送曲の消え入る調べを奏でていく。

最初は人工の「恋人」同士になる青年と少女との思慕の気持ちが真に盛り上がってきってしまう説明に当たる部分は敢えて捨ててあるし、彼ら二人がかたときも離れず過ごしたろうひと夏の毎日でも果敢に省略してすぐに夏の終わりへと飛ばしてしまう。少女が青年の実家へ招かれるところでも、青年の義兄が妙に陽気にはしゃいだり少女が謝意をことさら強く示したり、近づきつつある末期を予感してかそうでなくてかはともかく、既に知っているわれわれは観客には死の影が深く漂ってくる。

少女が自分の運命を知るか知らぬかも、さして問題とされない。いつ彼女がみまかる宿命と直面し健気に覚悟を固めたかについては素通りされ、唯一生への執着を示す夜の公園の場面でも、さほど激しく取り乱さずに述懐する。こんなふうだから、ラストでの少女の死が画面上では暗示どまりなものも当然というもので、その代わり西穂高のケルンがまさに墓碑として画面中央に位置し、クレジットタイトルが流れていく間じゅう彼女を追悼するしるしとして立つ。

また山岳部のコンパで自ら白血病だと告白する場面、青年以外は冗談と受け止め全く信じようとしないぶん、若すぎる彼女が死ななければならぬ残酷さがきりきりと胸をえぐる。で、耐え切れず少女はスナックを飛び出し青年がそれを追いかけるのだが、カメラの方はすぐに動かない。「娘さん、よく聞けよ……」と「山男の歌」をがなりたてるように合唱する部員たちの健康でたくましい生命力の発散ぶりを、カメラ位置を変えてもうワンカット加えてまでしてなおしばらくの間写し続け、対照して強調するのだ。

禁じられた恋を描いたデビュー作『野菊の墓』<sup>81</sup>をはじめ、考えてみれば、『Wの悲劇』<sup>84</sup>『早春物語』<sup>85</sup>『めぞん一刻』<sup>86</sup>『恋人たちの時刻』<sup>87</sup>といずれも、感情のむやみな高揚よりは抑圧された恋情のひそやかな発露ばかりを澤井信一郎監督は描こうとしてきた。その基本スタイルが、少女を主人公にした難病ものという題材を得てもゆるがせにされていないのは、けだし当然のことだろう。丸山昇一脚本もこのスタイルに律儀につき合って、足を踏み外さずにきっちりと感情の斜面を下っていく。

遺された鉢植えの可憐に咲くカトレアの花のアップにタイトル文字の重なる第一ショットに始まりケルンの墓碑の終幕に至るまで、しばしばゆらりゆらりと上下左右に旋回し移動しながら青年と少女を捉えていくカメラは、一度たりとも上昇しないまま死の淵へと下降していく娘の運命を静かに語りゆく。

作者たちは対象に過度に没入するのを避け、距離をおいて悲劇を見つめる。たとえば少女の

唇に紅をさすことが二度重要なポイントとして使われたりするあくまで正攻法の芝居運びといい、頑固にズームを使わずゆったり対象に近づき離れるカメラワークといい、感傷の勝った甘美な音楽といい、一見通俗風の語り口でありながら、その実、冷静に、格調高く、ひとつの若い生命の喪失が見つめられる。人と人とが愛し合い、そして死がそれを引き裂くことのいたましさをくっきりと心に焼きつけてくれる一作だ。】（B級映画評論家通信 88 年 4 月）

この作品で、後藤は日刊スポーツ映画大賞新人賞を受賞している。その成功を受けて次に送り出された主演作は『ガラスの中の少女』（88 出目昌伸 脚・重森孝子 原・有馬頼義）だ。3 月の『ラブ・ストーリーを君に』は単独のロードショー興行だったのに対し、こちらは仲村トオル主演の『悲しい色やねん』との 2 本立て東映 89 年お正月番組として公開された。相手を務めるのは、男性タレントコンテストでグランプロを取ったばかりの吉田栄作でこれが彼の俳優デビュー作となる。

これは、吉永小百合、浜田光夫コンビの『ガラスの中の少女』（60 若杉光夫）のリメイクである。ただ、内容は大幅に変更されていた。前作は少女と中学時代同級生だった少年との話であり、高校生のヒロインは気位の高い大学助教授の継父の強圧に、工員の少年は酒乱の父にそれぞれ悩み、互いの仲が引き裂かれるのを案じて追い詰められていく。吉永は初主演、浜田はまだ本名の光曠でクレジットされるデビュー作という頃で、上映時間 64 分の中編作品でしかない。

こちらは 97 分の長編であり、後藤のヒロインは大臣級政治家（津川雅彦）の娘で父の秘書だった継母（萬田久子）との 3 人で暮らしている。吉田栄作の演じる少年は彼女の同級生ではなく、所持していた密造拳銃を預かってくれと頼む行きずりの無職だ。その銃をめぐるあれこれがあった末、両親と争ったヒロインは少年と家出し警察に連れ戻される。そして二人は隔離され、少年は金を餌にフィリピンへ去ることになった。両親の策略に気付いた彼女は空港に駆けつけるが、再会の直前に少年は事故死する。

お嬢様と無頼少年の恋が大人の思惑に翻弄される悲劇であり、話の構造は陳腐の誹りを免れまい。しかし、後藤の存在感は屹立しており、これが 14 歳なのかと感嘆させるだけのものがあつた。その感嘆の念を、わたしはこう綴っている。

【出目昌伸監督＝重森孝子脚本のコンビといえば即座に『俺たちの荒野』69 が思い浮かぶ。酒井和歌子と黒沢年男に東山敬司を加えた男女三人の若者がベトナム戦争中の米軍基地の町で送る青春を、甘さと苦さの双方をこめつつみずみずしく描き出した、約二十年も前の青春映画の秀作だ。

その名場面、三人が陽光の下で野原に遊ぶピクニックと似たシーンがここにもある。少年・吉田栄作がヒロイン後藤久美子を自分たちの隠れ家になっている川べりの小屋に連れてきて仲間のフィリピン人少年と三人で河原に遊ぶ。笛を吹き、歌い、笑い、駆けまわり、フィリピンの

民族舞踊に興じる。だが、男二人と女の三者関係の危うい均衡が背景にあり最後に突然ふざけて鉄塔によじ登った若者の事故、自殺どちらともとれる死の悲劇を迎える『俺たちの荒野』のピクニックとは、まるで緊迫感が違う。ただ子供っぽいじゃれ合いが続くばかりでは苦さまでを含んだ青春映画にはなりようがなく、美少女・後藤久美子の姿を見せるだけの映画か、と早くも落胆させられかかる。

その印象をますます強めるのは、ヒロインの気ままなわがまま少女ぶりだ。大物政治家の一人娘としての豊かで格式張った生活ぶりとプライドの高さが念入りに示され、密造拳銃を預けてしまったために彼女の気まぐれのせいでなかなか返してもらえず翻弄される少年が苛立つのと同様に、観ている方もいささかうんざりさせられる。

それが、少女と少年とが恋心を募らせていくにつれ様子が変わってくる。後藤久美子がめきめきおとなびて色気を感じさせ、中学生と思えぬたじろぐほどに強烈な女の匂いを発散させるようになる。

まず、ラーメン屋での食事で、食欲の湧かぬ少女が残した丼を少年に与えるとそのまま無頓着に彼女の箸を使ってたべ始めるのを見て、あ、箸……とこだわるところに、女として彼を見はじめたことがうかがえる。

だから、親といさかいを起こして少年と別荘へ逃げるのも、単なる子供の家出ではなく男との逃避行の気構えで、むしろ少年の方が無邪気に接している。山荘のベランダで四囲に蝋燭を灯してダンスを踊る二人は、満天の星をもっとよく見るため明かりを消そうとする。そういえば東京でのデートはいつもプラネタリウムの人工の星空の下だったから、彼らはここで初めて本当の星を眺めるわけだ。灯をひとつひとつ吹き消すたびに少女の顔が徐々に影を落としていくのが美しい映像になっているが、それは同時に彼女の表情に刷かれる不安の色でもある。その不安は、自らの中の女の部分が急激に噴出していきそうな怯れを感じてのことであり、全部は消さないで！と思わず口にする。結局は別々に眠りにつくにせよ、中学生の少女には十分に刺激的な一夜だ。

連れ戻されて仲を引き裂かれ少年の死という悲劇的結末へとひた走るその後は、はっきりと男女の恋愛物語になっている。少年に会いに行くためにボディガードの男に突然生理になったという嘘を、このお嬢様がつくだ。生理まで材料に使うなりふり構わぬ態度が、女らしくてなまなましい。

少年のあっけない死がこの濃密な恋を突如中断させるのは物足りない終わり方だが、青春映画ではない代わりに、こんな年若のヒロインにしては異例の男と女の恋愛映画に仕上がった。年端も行かぬ身で、後藤久美子というのはなかなかの女優だ。】（B級映画評論家通信 89年1月）

その後、後藤久美子は山田洋次監督に見出され、『男はつらいよ』シリーズで渥美清演じるフーテンの寅さんの甥・満男（吉岡秀隆）が思いを寄せる元同級生役で準レギュ

ラー出演する。満男と後藤演じる父母の離婚で家庭的に恵まれない少女・泉ちゃんの恋は、『男はつらいよ』世界の中の青春映画部分を形成するような初々しさがあって印象的なアクセントとなった。

『ぼくの伯父さん』（89 山田洋次）、『寅次郎の休日』（90 山田洋次）、『寅次郎の告白』（91 山田洋次）、『寅次郎の青春』（92 山田洋次）そしてシリーズ最終作『寅次郎紅の花』（95 山田洋次）で遂に満男と結ばれる。後藤の 15 歳から 21 歳まで 6 年にわたって繰り広げられた満男と泉の物語は、このシリーズ終盤を彩る長編ラブ・ストーリーとなった。

その一方、ジャッキー・チェン主演の香港映画『シティーハンター』（93 バリー・ウォン）に出演した縁でフランス人 F1 ドライバーのジャン・アレジと交際が始まり 95 年に婚約、96 年には渡仏して結婚、出産し芸能界を引退する。

80 年代最後のアイドルと言っていい後藤久美子の後、それまでのような青春映画のアイドルは登場していない。もちろん、アイドルという存在は現在の AKB に至るまで常にあるものの、そのアイドル個人の人気だけで青春映画に主演してヒットさせるだけのスターは 90 年代以降には見当たらなくなった。

青春映画の変質という要素も影響しているだろう。それは改めて別の機会に論じたいテーマである。ともあれ、わたしの追いつけてきた種類の「アイドル青春映画」の時代は、このあたりで終わっている。またわたし自身、四十路を迎えアイドルや青春映画に対する感度が鈍くなってきていたこともあるだろう。

それら諸々の理由から、わたしの叙述するアイドル青春映画の時代はひとまずここで区切ることとしたい。

※寺脇研「アイドル映画の時代」は今回をもちまして連載を終了させていただきます。これまでご愛読いただきありがとうございました。大幅に加筆修正をして、書籍として発売を予定しております。皆様楽しみにお待ちください。